

縄文時代晩期前葉における姥山式土器の影響を受けた大宮台地出土土器群の考察

田邊 えり

はじめに

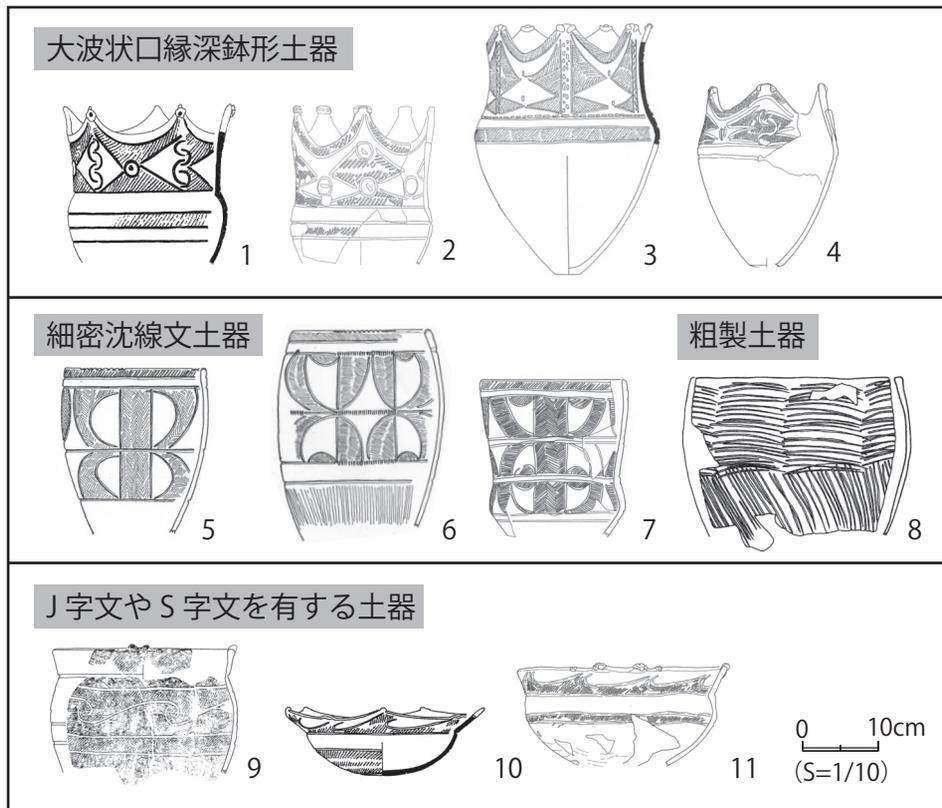
縄文時代晩期前葉の後半期にあたる安行3b式期には、関東東部地域を中心に姥山式⁽¹⁾と呼ばれる特徴的な土器群がみられる(第1表、第1図)。

後期安行式という齊一的な土器型式が分布していた関東地方において、安行3b式期になると東西差が生じ始め、晩期中葉に向けて地域差が次第に拡大し

ていく。地域差出現の画期となるこの時期は、縄文時代後晩期に急速に進んだ社会複雑化を検討する上でも重要な時期の一つであると言える。大宮台地は、伝統的な安行式を受け継ぐ地域であり、安行3b式の中心的な出土地でありながら、異系統である姥山式の影響を少なからず受けている。本稿ではその変遷を追うことで、東西関東の地域間関係について考察する。

	西関東	東関東	東北
晩期前葉	安行3a式		大洞B1・B2式
	安行3b式	姥山式	大洞BC式
晩期中葉	安行3c式	前浦Ⅰ式	大洞C1式
	安行3d式	前浦Ⅱ式	大洞C2式

第1表 土器型式併行表



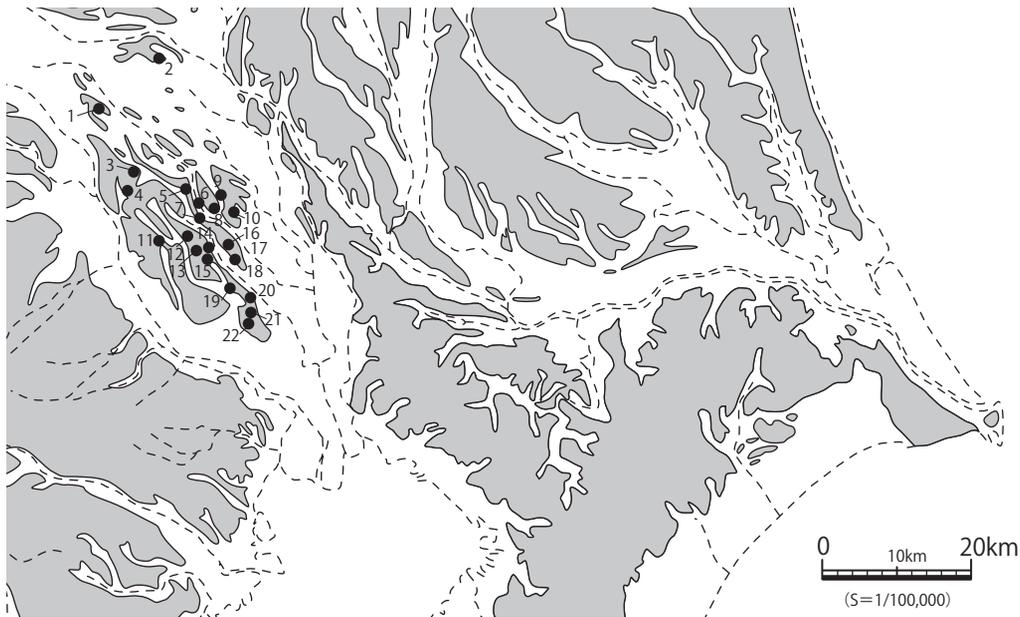
1: 茨城県常総市築地遺跡 2: 千葉県千葉市加曾利貝塚 3: 千葉県匝瑳市多古田遺跡 4: 千葉県袖ヶ浦市上宮田台貝塚 5・6: 千葉県松戸市貝の花貝塚 7: 千葉県市川市道免き谷津遺跡 8: 千葉県我孫子市下ヶ戸貝塚 9: 千葉県佐倉市宮内井戸作遺跡 10: 千葉県匝瑳市久方貝塚 11: 千葉県印西市馬場遺跡第5地点

第1図 姥山式土器に特徴的な器種

1 姥山式の研究略史

姥山式は、千葉県山武郡横芝町山武姥山貝塚の資料をもとに、鈴木公雄によって提唱された（鈴木1963）。鈴木は姥山Ⅰ～Ⅵ式を設定し、姥山Ⅱ式、Ⅲ式が安行3b式併行期に関東東部地域を中心に分布する土器群として位置づけられた。鈴木は翌年、数遺跡の出土資料を追加し、姥山Ⅱ式の内容をより具体的に示した（鈴木1964）。姥山Ⅱ式とⅢ式は、縄文の有無によって区別され、時期差や地域差、もしくは同時期のバラエティとして研究史において激しく議論されたが（杉原・戸沢1963・1965、鷹野1978、鈴木・鈴木1982、藤本1988など）、筆者は両者を明確に区別する必要性は低いと考えており、両者を合わせて「姥山式」と呼称している（田邊2021）。

姥山式は、大波状口縁深鉢形土器に菱形区画と入組み弧線文や列点文、円圈文の組合せが施される点が安行3b式と大きく特徴を異にしている（第1図）。さらに、細密沈線文やJ字文、S字文、条線のみを有する粗製土器など特徴的な文様を有する。鈴木公雄の提唱以降、姥山式の出土が相次ぎ（鈴木1965、1982、梶山・金子1972、八幡編1973、永松他1976、杉原編1976、米田他編1977など）、安行3b式との文様や分布圏の違いが明らかになった。しかし、1980年代以降姥山式をめぐる議論は下火となり、型式の認定に有効な一括資料に恵まれなかったことも相まって姥山式を型式と捉えるか否かといった根本的な課題が依然として解決されないままとなっていた。そこで筆者は、佐藤達夫の異系統土器論を適用し、姥山式を「系統としての型式」として捉えることにした（田邊2021）。なお、晩期安行式や姥山式についての詳細な研究史についてもこちらの論考を参照いただきたい。



1 鴻巣市	赤城遺跡	9 白岡市	前田遺跡	16 さいたま市	真福寺貝塚
2 加須市	長竹遺跡	10 さいたま市	裏慈恩寺遺跡	17 さいたま市	真福寺泥炭層遺跡
3 桶川市	後谷遺跡	11 さいたま市	奈良瀬戸遺跡	18 さいたま市	黒谷田端前遺跡
4 桶川市	高井東遺跡	12 さいたま市	東北原遺跡	19 さいたま市	馬場小室山遺跡
5 久喜市	小林八束遺跡	13 さいたま市	寿能泥炭層遺跡	20 川口市	赤山遺跡
6 白岡市	入耕地遺跡	14 さいたま市	小深作遺跡	21 川口市	上台（精進場）遺跡
7 蓮田市	久台（ささらⅡ）遺跡	15 さいたま市	前窪遺跡		宮合貝塚遺跡
8 蓮田市	雅楽谷遺跡				

第2図 大宮台地の遺跡分布図

2 研究の目的

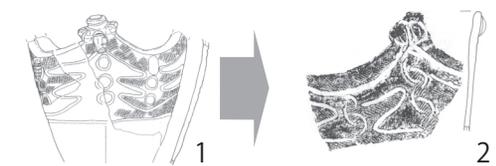
姥山式の研究が80年代以降なかなか深化せず停滞する現状において、筆者はその位置づけや実態を明らかにする試みを行った。その中で、大宮台地で出土する安行3b式期の土器群の中に姥山式の影響を大きく受ける土器群を確認した。これらは研究史において「姥山系」と呼ばれている土器群であり（鈴木・鈴木1982、奥野1998、新屋1992、村田2004）、安行式と姥山式の要素が混在したキメラ土器（大塚2000）と捉えられることが多いが、姥山式に限りなく近い特徴を有していることを明らかにした（田邊2021）。この論考においては、安行3b式期の大波状口縁深鉢形土器の分析のみを掲載したが、その他の器種や前後の時期にも姥山式の影響を受けたもの、もしくは姥山式に影響を与えた可能性が指摘できる土器群の存在を確認した。本稿では、それらの土器の特徴について検討することで、東西関東の地域間関係についてより深く考察することを目的とする。本稿で主に扱う大宮台地の遺跡分布図を第2図に示した。

3 時期ごとの変遷

3.1 安行3a式終末期

この時期には、姥山式の祖型となるモチーフが出現する（第3図）。姥山式に特徴的な菱形区画に類似したこのモチーフの出現過程については、別稿で詳述する予定である。筆者は祖型モチーフから姥山式の成立までに2段階を考えており、成立直前段階では、その分布は東部地域に集中することが判明している（第4図）。詳細は別稿に譲るが、成立過程の第一段階においては、東部地域に限らず関東地域の広範囲で出土が確認され

姥山式直前第一段階



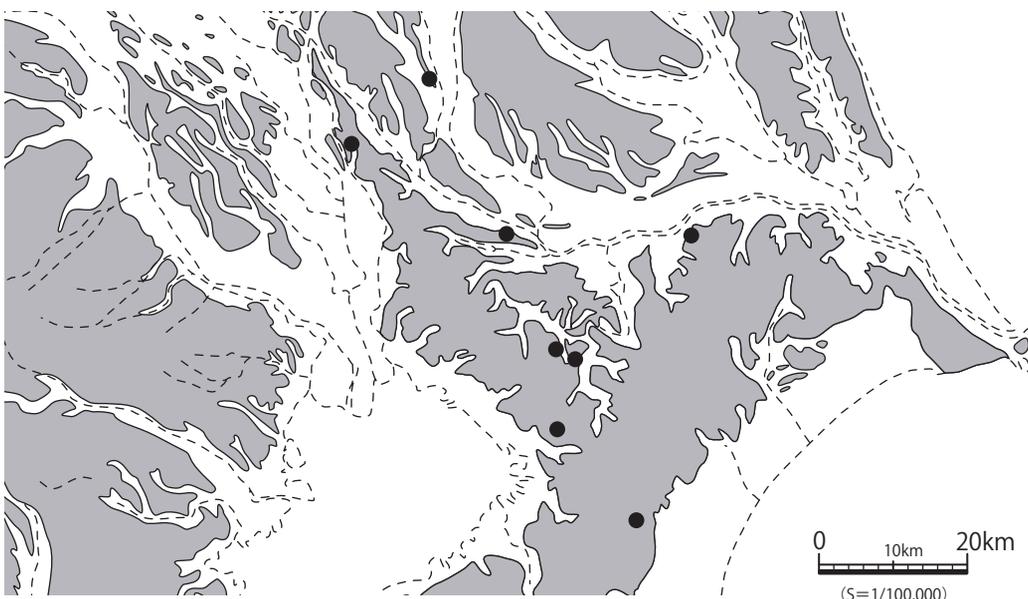
1: 茨城県つくば市上境旭台貝塚

2: 千葉県成田市公津原遺跡

0 10cm
(S=1/8)

第3図 姥山式土器成立の直前段階

ている。姥山式の成立過程における大宮台地出土土器群との関連や、第二段階において分布が東部地域に集中する背景について検討するため、分析を進める必要がある。



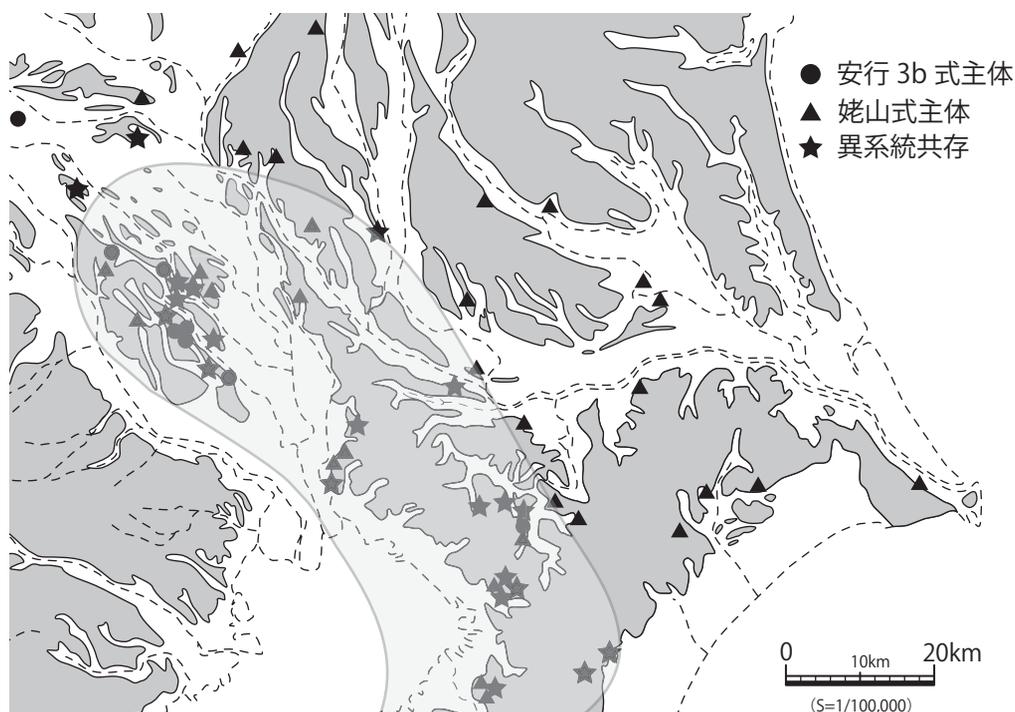
第4図 姥山式直前段階分布図

3.2 安行 3b 式期

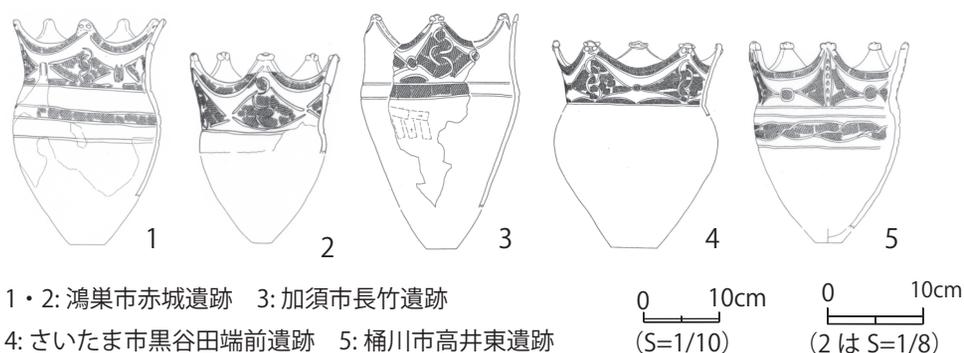
この時期は、関東西部地域に安行 3b 式が、東部地域に姥山式が中心的に分布するが、大宮台地の多くの遺跡では両者が混在して分布している。前述したとおり、大宮台地で出土する姥山式の影響を強く受けた土器群は「姥山系」と総称されている。以下では、大波状口縁深鉢形土器、細密沈線文土器、粗製土器の3つにわけて大宮台地での分布状況を述べる。

(1) 大波状口縁深鉢形土器

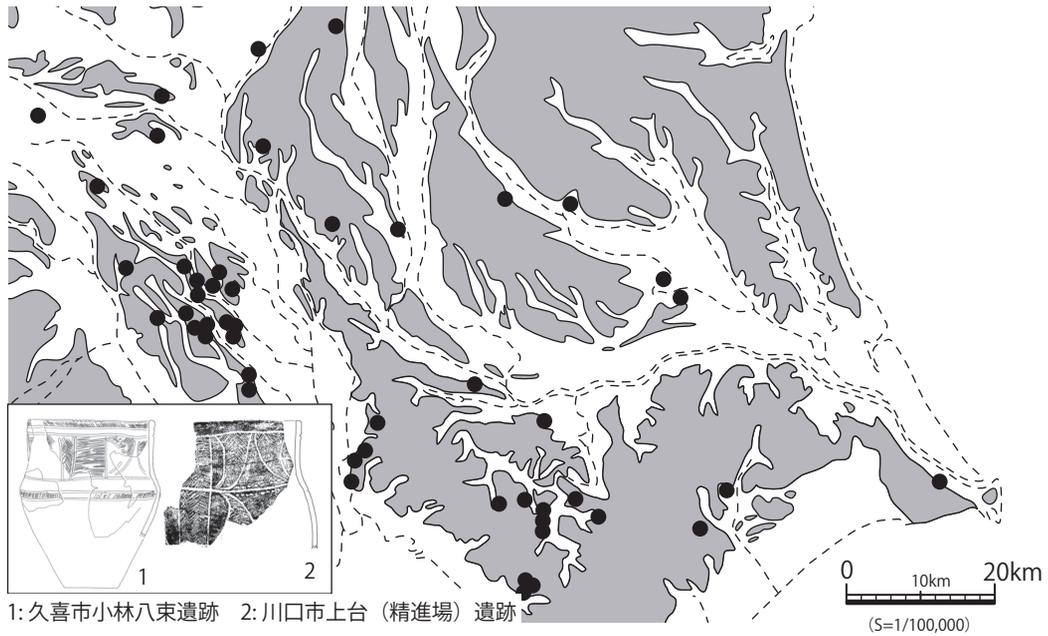
大波状口縁深鉢形土器の分布状況を第5図に示した。大宮台地に分布する「姥山系」の大波状口縁深鉢形土器について分析したところ、その多くは限りなく姥山式に近い特徴を有することを明らかにした(田邊 2021)。しかし一方で、文様を細かく観察すると、大宮台地特有の要素がみられた。例えば、曲線的な文様区画(第6図2・4)や口頸部文様帯の弧線文(第6図3・4)、寸胴な器形(第6図1・3)、入組み弧線文が崩れた蛇行状沈線(第6図2)といった安行 3b 式に特徴的な要素、または典型的な姥山式には確認できない要素である。特に、口頸部の文様帯に施文された曲線的な区画線と弧線文は多くみられ、先行研究で指摘されているように(鈴木・鈴木 1982)、晩期安行式に伝統的な磨消弧線文の影響であると考えられる。このほか、出土量はかなり少ないが、キメラ土器と言えるような要素が激しく混在した土器も一部確認できる(第6図5)。



第5図 大波状口縁深鉢形土器の分布図



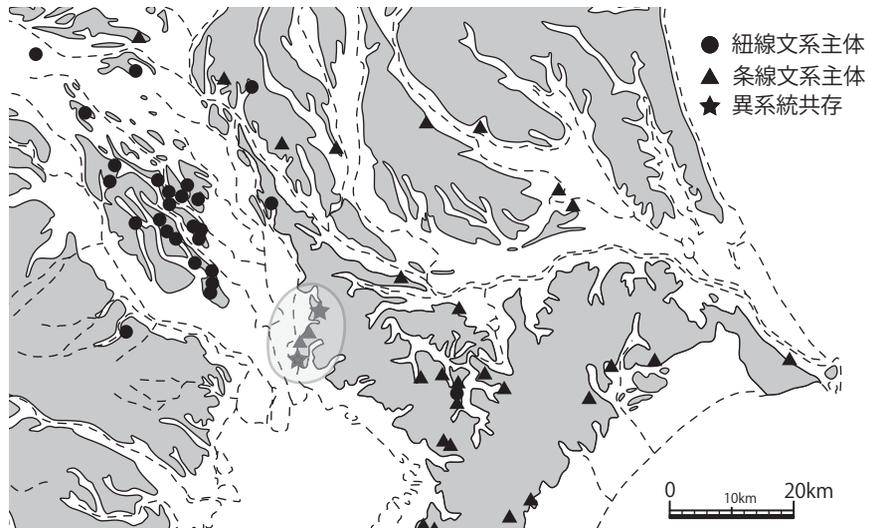
第6図 大宮台地出土「姥山系」大波状口縁深鉢形土器



第7図 細密沈線文土器分布図

(2) 細密沈線文土器

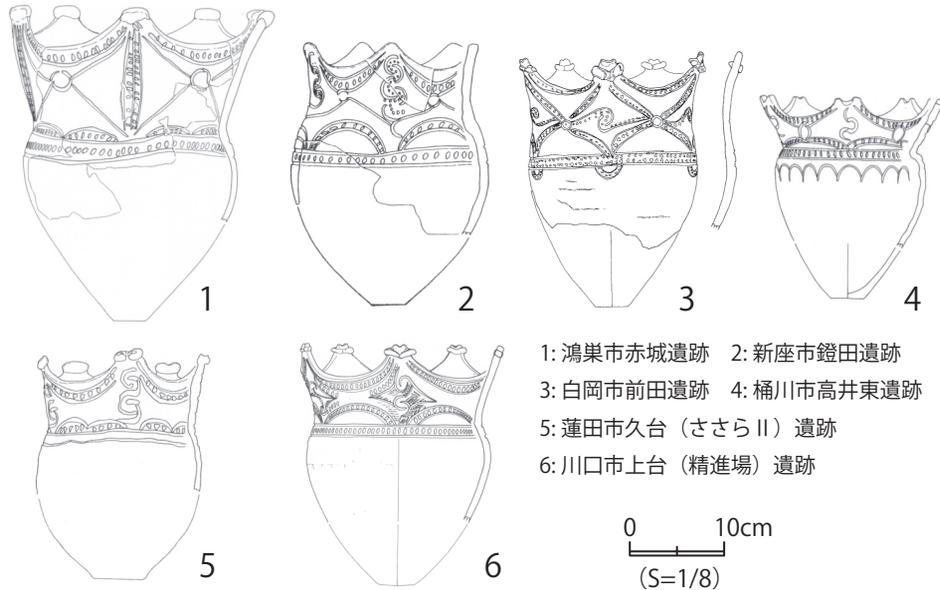
細密沈線文土器は、姥山式の特徴的な器種の一つである（第1図5～7）。その出現過程や分類等については今後詳細な検討が必要になるが、今回は大宮台地での出土状況について分析する。細密沈線文土器は大宮台地の遺跡で多く出土しており、姥山式大波状口縁深鉢形土器が出土していない遺跡においても出土が確認されている（第7図）。細密沈線文土器は平口縁深鉢形土器の出土が圧倒的に多く、そのほかに鉢形や浅鉢形のものも少量であるが確認できる。大宮台地においても深鉢形土器が多い傾向は同様であるが、広口壺のような器形が出土している点が特徴的である。（第7図1・2）。この特徴的な器形を有する細密沈線文土器は大宮台地以外の地域では今のところ出土しておらず、大宮台地特有の要素と言える。



第8図 粗製土器分布図

(3) 粗製土器

姥山式の粗製土器は、条線のみを有するという点で非常に特徴的である（第1図8）。それに対して安行3b式の粗製土器は、後期安行式からの紐線文系の伝統を引き継いでいる。粗製土器の分布をみると、大波状口縁深鉢形土器や細密沈線文土器と異なり、東西地域で分布が明確に分離していることがわかる（第8図）。

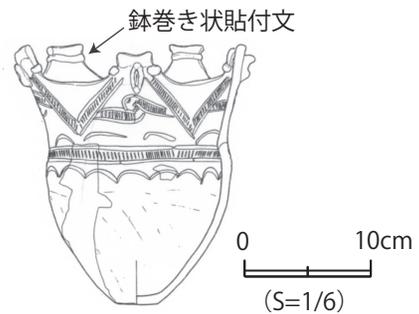


第9図 姥山式の影響を強く受けた安行3c式土器

3.3 安行3c式期以降

姥山式の影響は、安行3c式にも引き継がれていく。先行研究で指摘されているように、姥山式の特徴である菱形区画を受け継いだ系統が安行3d式までつづく（鈴木・鈴木1983、新屋1996、奥野1998）。本稿の対象は縄文時代晩期前葉であるため、安行3c式期以降の様相については簡単な指摘にとどめる。

姥山式の影響として第一に指摘できるのが、「文様帯の縦位分割意識」（奥野1998）である。先行研究で「背合わせ弧線文」（鈴木・鈴木1983）と呼称された文様を有する埼玉県域出土資料をみると、姥山式の影響力が十分に読み取れる（第9図）。縦位分割意識のみならず、入組弧線文や円圏文の名残をとどめるものや波頂部の鉢巻き状貼付文が確認できる。安行式に伝統的な、三角形区画帯の安行3c式にも鉢巻き状貼付文がみられる例があり（第10図）、姥山式の影響が強く及んでいることがわかる。



第10図 赤山遺跡出土土器

4 東西地域の影響関係についての考察

以上の分析から、縄文時代晩期前葉における東西地域の影響関係について、姥山式の与えた大宮台地への影響力を中心に考察する。

まず、安行3a式終末期にあたる姥山式出現期の段階では、分布は関東東部地域に集中しており、西部地域への大きな影響力はみられない。安行3b式期になると、姥山式の分布範囲が大宮台地まで広がり、姥山式大波状口縁深鉢形土器や細密沈線文土器が出土する。姥山式の東部地域への影響力が拡大していることがわかる。ただし、安行3b式と姥山式の文様におけるキメラ化はそれほど進行せず、

粗製土器の分布も明確な東西差がみられるなど、それぞれの系統を保ちながら共存する様相がうかがえる。

姥山式の影響力は晩期中葉以降にもつづき、姥山式の影響を強く受けた系統が安行 3c 式以降の主要な系統の一つになる。安行 3b 式期が異系統共存の状態であったのに対して、安行 3c 式期は、関東西部地域が姥山式の影響を強く受け、キメラ土器的な成立過程によって安行 3c 式の主系統の一つが生み出されていくと考えられる。本稿では触れていないが、関東東部地域では晩期中葉になると、姥山式から前浦式へと変遷し、東西差がより一層明確になる。

後期後葉からつづく伝統的な安行式を安行 3d 式まで引き継ぐのは、一貫して関東西部地域であり、東部地域の姥山式の影響力は過小評価される傾向にある。しかし、必ずしも異系統である姥山式の影響力が弱かったわけではない。関東東部地域には、姥山式しか確認できない地域が少なからず存在するなど、少なくとも土器様相からは、安行 3b 式期に西部地域の影響力が縮小している様子が読み取れる。縄文時代晩期中葉にいたるまで姥山式が西部地域に少なからず影響力を及ぼしていたことが明らかになった。

5 今後の課題

本稿では、姥山式の影響を受けた大宮台地出土土器群について、安行 3a 式終末期から安行 3c 式にいたるまでの変遷をたどった。現在筆者は、今回主に扱った前後の時期に該当する、姥山式の成立過程や縄文時代晩期中葉の土器群についての分析を進めている。今後も成果を発表していくことで縄文時代晩期の地域間関係について土器から読み解いていきたい。

参考文献

- 新屋雅明 1992 「大宮台地出土土器を中心とした安行式土器の編年」『シンポジウム縄文後・晩期安行発表要旨』埼玉考古学会「土偶とその情報」研究会, pp.9-17
- 新屋雅明 1996 「埼玉地域の安行 3c 式」『下津弘君・塚越哲也君追悼論文集 埼玉地域文化の研究』下津弘君・塚越哲也君追悼論文集刊行委員会, pp.233-253
- 新屋雅明編 1988 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 74 集 川里工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告 赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 石田守一編 2016 『我孫子市埋蔵文化財報告第 54 集 下ヶ戸貝塚Ⅲ 下ヶ戸宮前遺跡発掘調査報告書Ⅲ』我孫子市教育委員会
- 江原美奈子 2012 『茨城県教育財団文化財調査報告第 364 集 上境旭台貝塚 2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 X V』財団法人茨城県教育財団
- 大塚達朗 2000 「異系統土器論としてのキメラ土器論—滋賀里遺跡出土土器の再吟味—」『異貌』18, pp.2-19
- 奥野麦生 1998 「V 考察 前田遺跡出土の縄文時代後・晩期の土器群について」『白岡町埋蔵文化財調査報告書第 9 集 前田遺跡 町内遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』白岡町教育委員会, pp.124-141
- 奥野麦生・杉山和徳 2014 『白岡市埋蔵文化財調査報告書第 23 集 前田遺跡 (第 2 地点) 市内遺跡群発掘調査報告書 X X I』白岡市教育委員会
- 小倉和重編 2009 『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 266 集 千葉県佐倉市宮内井戸作遺跡 (旧石器時代編) (縄文時代本文・分析編・縄文時代遺物図版編) —ちばりサーチパーク開発事業予定地内埋蔵文化財調査 (8) —』印旛郡市文化財センター
- 金箱文夫編 1989 『川口市遺跡調査報告第 12 集 赤山 本文編・第 1・2 分冊 —一般国道 298 号 (東京外かく環状道路) 新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』川口市遺跡調査会
- 喜多裕明編 2011 『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 295 集 千葉県印西市道作 1 号墳 (第 2 次)・馬場遺跡第 5 地点 (第 1 次・第 2 次)—印西市道 00-031 号線道作古墳群・馬場遺跡埋蔵文化財調査—』印旛郡市文化財センター

- 埼玉県遺跡調査会 1974 『埼玉県遺跡調査報告第25集 高井東遺跡報告書(本文編・図版編)』
- 島立桂・蜂屋孝之・服部智至 2014 『千葉県教育振興財団調査報告第729集 東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書5 一市川市道免き谷津遺跡第1地点(3)一』千葉県教育振興財団文化財センター
- 白石竹雄・天野努 1981 『公津原Ⅱ』千葉県教育委員会
- 杉原荘介・戸沢充則 1963 「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』3-2, pp.17-48
- 杉原荘介・戸沢充則 1965 「千葉県堀之内貝塚B地点の調査」『考古学集刊』3-1, pp.15-36
- 杉原荘介編 1976 『加曾利南貝塚』中央公論美術出版
- 相山林継・金子裕之 1972 「千葉県富士見台遺跡の調査」『考古学雑誌』58-3, pp.65-88
- 鈴木公雄 1963 「千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて」『史学』36-1, pp.67-94
- 鈴木公雄 1964 「姥山Ⅱ式土器に関する二・三の問題」『史学』37-1, pp.69-96
- 鈴木公雄 1965 「千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて」『史学』38-1, pp.103-125
- 鈴木公雄 1982 「第2章縄文時代 第5節多古田泥炭層遺跡」『八日市場市史 上巻』八日市場市史編さん委員会, pp.28-77
- 鈴木正博・鈴木加津子 1982 「安行3b式研究の序-山内清男博士の学説から鈴木公雄氏の新説を批判する-」『土曜考古』5, pp.107-116
- 鈴木正博・鈴木加津子 1983 「安行式遺蹟解題(1)一埼玉県岩槻市裏慈恩寺遺跡の分析一」『土曜考古』7, pp.23-46
- 鷹野光行 1978 「前浦式土器の研究」『考古学雑誌』64-3, pp.1-22
- 田邊えり 2021 「安行3b式期における東西関東の地域間関係一姥山式土器の検討を中心に一」『東京大学考古学研究室研究紀要』第34号 pp.1-28
- 永松実・斎藤隆・渡辺昌宏編 1976 『小山台貝塚』図書刊行会
- 新座市教育委員会市史編さん室編 1984 『新座市史 第一巻 自然・考古・古代中世資料編』
- 西野雅人・米倉貴之編 2017 『史跡加曾利貝塚 総括報告書 第1分冊』千葉市教育委員会
- 橋本勉 1985 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第47集 国道122号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ ささら(Ⅱ)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 藤本弥城 1988 「茨城県広畑貝塚出土の晩期縄文土器」『考古学雑誌』73-4, pp.1-35
- 細田勝編 2018 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第442集 小林八束遺跡Ⅱ 総合交付金(河川)工事(小林調節池)埋蔵文化財発掘調査報告書(第1分冊)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎朝雄編 1976 『黒谷田端前遺跡』岩槻市遺跡調査会
- 村田章人 2004 「さいたま市寿能泥炭層遺跡出土安行3b式波状口縁深鉢の口縁部文様に関する考察」『埼玉県立博物館紀要』29, pp.15-28
- 安井健一 2010 『千葉県教育振興財団調査報告第638集 首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書10 一袖ヶ浦市上宮田台遺跡2(旧石器・縄文時代)一第一分冊(本文編)』千葉県教育振興財団文化財センター
- 山内利秋 2002 「試論:晩期安行式、前葉から中葉への論説史一安行3b式・3c式と姥山Ⅱ式系土器群に関して一」『國學院大学考古学資料館紀要 加藤晋平先生古稀記念』18, pp.165-182
- 八幡一郎編 1973 『東京教育大学文学部考古学研究報告Ⅱ 貝の花貝塚』東京教育大学文学部史学方法論教室
- 吉田健司・鈴木加津子 1992 『川口市文化財調査報告書第30集 一精進場遺跡一(1)』川口市教育委員会
- 吉田健司・鈴木加津子・土肥孝 1993 『川口市文化財調査報告書第31集 一精進場遺跡一(2)』川口市教育委員会
- 吉田稔・渡辺清志編 2018 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第440集 長竹遺跡Ⅱ 首都圏氾濫区域堤防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告書(第1・2・3分冊)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 米田耕之助他編 1977 『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ

(註)

- 1:「姥山式」の呼称は、加曾利E式を指す用語として付与された学史があり、かつ、Ⅱ式・Ⅲ式のみを抽出して姥山式と呼称することの問題も指摘されている(山内利秋2002)。今後この名称の使用については慎重に検討する必要がある。